

「後期幕府直轄時代」について(6-1)

今回は、蝦夷交易の儀式である、オムシャと目見礼についてみておきます。

オムシャとは、各場所ごとに行われたアイヌ民族に対する撫育策の一つで、初期にはアイヌ民族との交易の際の交歓儀式（互いに打ち解け楽しむ儀式）でした。が、後にアイヌ民族を統治・支配する手段として、各場所での重要な年中行事となりました。

なお、語源的にはアイヌ語のウムシャの転訛したものと云われ、これはアイヌ

民族の者同士が、久しぶりに会った際に、互いに体を撫んで、無沙汰の挨拶をする事です。

また、アイヌ民族には、隣国の首長と物々交換する交易の一つとして、ウイマムがあります。松前藩はウイマムを統治手段として重視し、藩主に拝謁することにより、交換交易よりも、政治的な支配効果を得る目的で行いました。後に目見礼として、松前・箱館の両奉行にも引き継がれました。

廣の時に上之国から松前大館に移り、「徳山館」とします。文禄2年（1593）、五世慶廣の時に、豊臣秀吉から「狹の嶋主」としての朱印状が与えられました。慶長4年（1599）、慶廣は「松前」に改姓し、慶長9年（1604）には徳川家康から黒印状を得、「アイヌ交易独占権」を手中にし、石高の無い「無高の藩」として松前藩が成立します。

オムシャの変遷

米の採れない松前藩は、蝦夷地（アイヌ地）の交易権を上級家臣に割り当て、年に一回割り当てられた場所（アイヌ「タタン」）に出向き、持参した米・酒・煙草などと、蝦夷産物とを物々交換し、松前に居る商人に自家の収入にしていました。

初期のオムシャは、知行主が年に一度、介抱と称して知行地に入り、その首長にあつと、無沙汰の挨拶を行い、友交の印として持

参の品を土産として贈り、首長もまた友交の印とし答禮の意味を持つて、その土地の産物を贈るという対等な立場でのものでした。この友好的な儀礼も、知行主が勢力を持つようになるとしたがい、オムシャは知行主がアイヌ民族に恩恵を施し、制令を伝える儀式となつて、交易の方法は一方的な経済目的となりました。

さらに、アイヌ民族を使役して漁業に従事するようになると、漁獵の開始や終了時の慰労のための行事として行われ、場所内のアイヌ民族を支配するための手段となつて行きました。

下の図は、幕末の絵師平沢屏山が東蝦夷地幌泉（現えりも町）でのオムシャの儀式の様子を描いたもので、上之国蠣崎氏の花沢館に居た武田信廣は、コシヤマイン父子を倒し蠣崎家を継ぎます。その子二世光



日高アイヌ・オムシャ之図（函館市中央図書館蔵）

座敷には葵紋（幕府の直轄）の幔幕が張られ、鎧が飾られています。前庭には陣羽織を着た役アイヌがゴザ席に並び、その前には役アイヌに贈る漆器や煙草がうず高く積み並べられ、多くの酒盃が用意されています。門の内外にはメノコ（女子）・セカチ（子ども）等が集まり、儀式が済めば与えられる振る舞いを待っています。